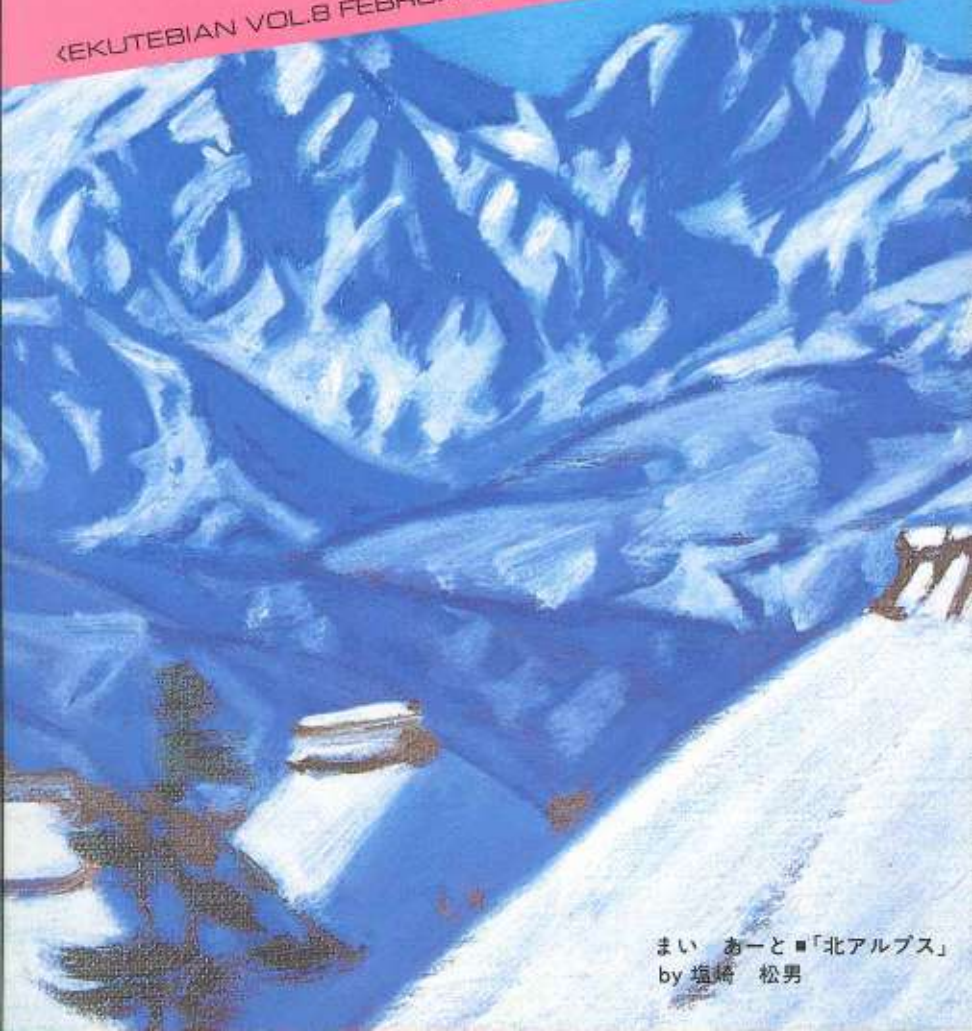
月刊

立川と語ろう　立川に生きよう

えくてびあん

2

〈EKUTEBIAN VOL.8 FEBRUARY 1991-EKUTEBIAN〉



まい　あーと ■「北アルプス」
by 塩崎　松男

続・百年へ翔べ！

多摩の中心都市としての「立川」が抱えている問題は山積みだが、その分、夢も希望もたっぷりと抱えているわが「立川市」。
市制五十年の式典で各界からの期待は、未来指向の「ゆめある大都市」であった。この日「少年の主張」があった。児童合唱が会場に響いた。若木を植えて未来に託す人、タイムカプセルに夢を詰め込む子供たち。五十年後にみる立川の姿は・・・

「大きくなァーれ」。4月29日、昭和記念公園での"緑化まつり"。未来への願いをこめて北の森では植樹祭が。

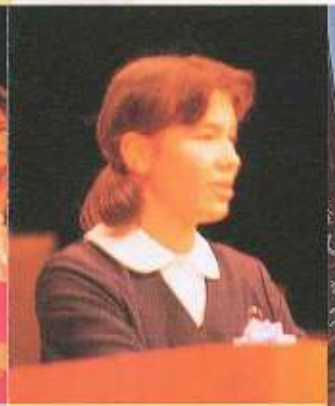
東京都知事をはじめ、立川ゆかりの方々が各方面から参列。祝辞をいただき会場は温かい空気に包まれていた。

8月5日、第24回東京都市町村総合体育大会を立川で開催。市制50周年に燃える立川の活躍めざましく総合優勝。

姉妹都市サンバーナディノ市のボブ・フォルコム市長も祝辞を。海を越えての姉妹の縁も早や30年を越えた。

立川の街に尽した人たちの代表137人が、この日表彰された。新体操の秋山エリカさんにも表彰状が贈られた。

新しい国際時代の笑顔もあふれて。



「少年の主張大会」市長賞受賞の神田めぐみさん（二中）も爽やかに発表。

市内の小・中学校ではタイムカプセルを校庭に埋めた。50年後の自分へのメッセージを手に。（市立二中で）

「ベスト立川人・展」が産声をあげたのが昭和60年。以来毎年、歳末に開催してきたが六回目の今回は年が明けてからの開展となり、新しい試みとした。また、惜しくも故人となられたが、立川文化に貢献された方の遺影も展示された。

立川人・展

市制五十年の佳き年にこんなにおおくの笑顔がうまれて

会場の駅ビル7階『ウイル・ギャラリー』には昨年一年間、立川人の目と心をおおいに温めてくれた方々の笑顔が27枚の写真としてズラリと並べられた。

昨年は市制50年ということから各種の行事がおこなわれ、明るい話題に満ちていたと云えよう。そんな中から、当編集部は市の識者に相談しながら取材活動を続けてきた。撮影にあたってくれたカメラマンも11名にのぼり、それぞれの技術的特徴を生かしきって、バラエティーに富んだ人物像が浮彫りにされていたと好評を博していた。話題性に富む江本佳寧子さん（魚料理日本一）や河林満さん（文学界新人賞）、それにスポーツで活躍された若い力に加えて、長年にわたって専門分野で貢献されてこられた、ひと言では表現出来ない歳月を積み重ねてこられた立川の長老方、高嶋幸一さん、谷川水車さん、荒井一さんらが取材に快く応じてくださったこともまた、今回の写真展を特徴づけていたようである。

また、北川冬彦さん、中野藤吾さん、児玉勝己さん、中込重春さん。この4方は惜しくも亡くなられてしまったが、いつまでもわが立川の人々に語り継がれるべきものを遺していってくださった。特別設置したコーナーも注目されていた。

ぐるり立川 11

うちのおじいさんが小学校に上る頃の話ですけどね。寺小屋が廃止になって、普済寺の心源庵、しんげんなみっていってたんですが、そこにあった塾と、横町（柴崎一丁目）にあった宮本塾が一緒になって、立川の小学校が出来たんだそうです。小学校が4年と高等科が4年。その4年を卒業する人は明治3年生れのおじいさんの時代にはおじいさん一人しかいなくて卒業試験は拝島まで一人で受けに行ったんですね。「その先生、用紙を置いたら『私は多摩川へ釣に行くから、その間に書いときなさい』って。俺、それで卒業しちゃった」って、一つ話になってますけどね。

甲武鉄道が出来ましたときは大変なもんで、八王子の二期工事がすぐ始まったんですけどね、買収のお金を幾軒かで分けて一晩だけ保管するんだそうですが、泥棒に入られやしないかって戦々兢々だったとか。その間に、私の実家のかやとに強盗が5人も入りましてね。大きな物音を立てて入ったもんですから近所が起きて駆けつけてくれましたので、何もとらずに逃げたんですけど、駅の方へ行ったから工事の者に違いないって言ってましたんですけどね。実家では毎年その日になるとそばを作って、その時世話になった近所の人たちに重箱で配ってましたですね。

（小川良さんの講演会「立川の思い出話あれこれ」より再録）

ことわざ問答 11

漢字一字挿入せよ

▼老いたる●の道しるべ

▼井に座して●を見る

1月12日土～2月3日日

「サヨナラ連続公演」

会場：シアター2+1
主催：シアター2+1

詳しくは☎(27)6410

表紙は語る

まい　あーと■「北アルプス」
by 塩崎　松男

ほのぼのとした家々の窓ごしに、老若男女の声が「鬼は外、福は内」と楽しそうに響きわたっている。日本で行われて約千三百年にもなるという。この日が過ぎれば暦のうえではもう春なのである。

さて、今月の表紙を飾ってくださったのは昭島市田中町にお住いの塩崎松男さん。立川美術会をはじめ、清興美術協会委員等筆力のみならず活躍されている。この道26年の味わいあふれたベテラン。

「うん、やっぱり風景の中でも山が好きですね。特に冬山は男性的でいいです。なにも身につけずに地肌そのものをみせている雄々しさはたまりません。私の場合は仕事も持っていますので、なかなか時間がとれないんですが、現場で描くことを信条にしています。なるべく足を運んでそれになりきるようにと思っています。やればやるほど難しいですね。深さを特に最近は感じます」と歩んできた年輪をひしひしと感じることが出来る。

立川・トピックス

相撲3選手栄光を手に

昨年12月16日、立川市相撲連盟主催により祝勝会が開かれた。

相撲といえば諏訪の森にある錬成館に集う少年力士達をイメージする人達も多いと思う。まさにここで育まれた少年力士が全国にはばたき、全国高校横綱、全国高校十和田大会優勝、全国中学横綱とビッグタイトルを総なめにした。ここに至るまでには理事長、会長をはじめ多くの先輩達によって育てられてきた結果であろう。また、ここで忘れてならないのはなんといっても、父母の温さだと思う。

羅漢さんに願いをこめて

砂川の古刹、流泉寺で今、五百羅漢の制作が進められている。去年、一体目のおびんずるさんが完成した。伊藤正彦住職、同寺壇頭の砂川昌平さんらが人々の心のよりどころに、と始めたもので、誰でも寄進できる。「発願のある毎に刻みます。今の時代、お金をかければすぐ五百体出来るでしょうけど、何十年何百年かかっても"心"を大切にしていきたい」と語る住職さん。砂川の風は暖かい。

東風

高嶋幸一さんが町役場に勤めはじめたのが、昭和5年のことだったという。ところで、立川が町から「市」になったのは昭和15年で当時、高嶋さんは主事、今日でいう「部長」級の役柄であったらしい。高嶋さんは「市制施行の儀につき」のタイプ打ちの上申書を卓において淡々と話を進める。この書類の骨子を拵えたのも高嶋さんであった♥ある宴席で、そろそろウチも市制施行しようや、と冗談のような話題が持ち上がった。その頃の立川町の人口は3万4千弱であった。町としてもようやく治めているのに市どころではない時代だ。瓢箪から駒とはよく云ったもので、宴席の座興が現実となった。駒の主役は他ならぬ高嶋さん♥当時の内務大臣・安井英二殿へ上申した分厚い書類は今、二冊しか残っていない。当時の町長・板谷信一郎氏（4代市長も）と高嶋さんの所にだけしか残っていないという。戦災で雨ざらしになってしまうところを物陰であやうく救われた高嶋さんの一冊をパラパラとめくっているだけで、胸が熱くなってくる。この中に「立川の志」がピッシリと詰まっているのかと♥高嶋家は幸一さんが14代目に当たるという、気の遠くなるような歴史を刻んできたわけだが、高嶋さんはどんな人でも立川に今日住めば、今日から立川人ですからと白い歯をみせて笑った、86歳♥えくてびあん訪ふ誰彼や　節分会。

真如苑だより

暖冬といわれながらも北風に首をすくめる日が多くなりました。でも、節分を迎え、立春が過ぎると季節はやはり、春。浅くはありますが、境内に春の気配が訪れはじめました。お出掛け下さい。●

■日時　2月15日
午後2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

立川クイズ

立川市の北部を占める砂川地区が開発され始めたのは、江戸時代の初期といわれています。その頃は砂川新田と呼ばれておりました。

荒涼とした原野を開墾するのは今の私たちには想像も出来ないような難事業だったに違いありません。しかし、努力と工夫を積み重ねて砂川は農業地帯として発展、明治から大正にかけ、ある特産物で全国にその名が知れ渡ります。さて、その特産物とは？

①麦　②大和芋　③桑苗

【先月号の答】❷

大雨が降るたび駅前にあふれる水を処理するために作られた縁川。現在、そのほとんどが暗渠となっているものの立派な現役です。"水源"は自衛隊駐屯地。羽衣町3丁目から国立市に入り、西国立駅の南の辺りで多摩川に注いでいます。

ことわざ問答

井に座して天を見る

投げやり気味の人間が陥いいこと。目を見る。喜の顔がらを天井をのぞく。井の中の蛙なる人間、回答。

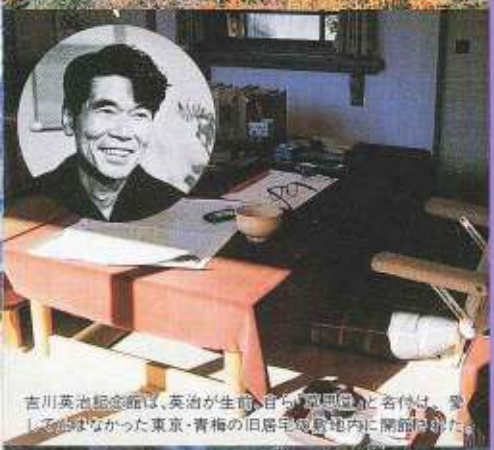
老いたる馬の道しるべ

年寄りの知恵を生かすこと。いろいろな道を歩いてきた経験を先輩に立てれば迷うことはない。

月刊えくてびあん　第79号
平成三年二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビューハイツ501（〒190）
電話　〇四二五(20)0082
FAX　〇四二五(20)1297
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大成社
（編集）小川知子　神山清子　熊川理　山田恵子　中村絵里　半沢正弘　原田悦子　馬場真木子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治
スタジオ269　牧川一巳　本多修

青梅の吉川英治さん

奥多摩がまちか、山の気配が迫るこの青梅の街に吉川英治が疎開したのが昭和十九年、名作「新・平家物語」はここで二五年に執筆された。多摩川の清流あり、梅郷あり、自然と文化の見事なハーモニーのなかで文豪のありし日を偲ぶ。ここはそんなまちである。



吉川英治記念館は、英治が生前、自ら「草思堂」と名付け、愛して止まなかった東京・青梅の旧居宅敷地内に開館された。

境内にある大仏殿の瓦

立川発

カルチャートレイン

半日ほどの「小さな旅」へ出てみませんか。そこには思いがけなく自然が息づいていたり、懐かしい「この人」に会えたり。

★立川駅から青梅線・二俣尾駅まで約30分
二俣尾駅から徒歩約15分。
MEMO:詳しくお知りになりたい方は、0428-76-1915へどうぞ。